

文化庁「生活者としての外国人」のための日本語教育事業
地域日本語教育実践プログラム A

「生活者としての外国人」のための 日本語読解教材（初中級）

こんな時、どうする？ どう思う？

社会福祉法人 さぽうと21

2018/03/20

「生活者としての外国人」にとって身近な事例を集めた、日本語読解教材です。まずは自分一人で辞書を引いたりしながら読んでみましょう。分からないところは、日本人に聞いてみましょう、書く文章の最後に質問があります。自分が考えたことを日本語で伝えてみましょう。

1 「家族の長い別離」

マリーの夫ピーターは、7年ほど前に複雑な事情が重なり、国を離れ、日本に来ることを決めた。マリーも娘のアンナと共に、日本に来る覚悟を決めていた。ところが、ちょうどそのころ、マリーの実の父親ががんで入院し、医師からは「余命10カ月」という宣告をされた。一人娘のマリーは苦しい選択を迫られた。朝起きるたびに前の晩の決心がゆらぐ。そんな毎日を過ごしていた。だが、一人娘のマリーは、もともと病弱な母に父を任せ、父親をおいて国を離れることはどうしてもできなかった。夫婦は別居を余儀なくされた。結局、父が亡くなった後、残された母の世話も必要となり、マリーが娘のアンナを伴って来日を果たしたのは、それから3年後の春だった。夫が国を出た時に小学校5年生だった娘のアンナは、すでに小学校を卒業し、まもなく中学校2年生になろうとしていた。

(357 字)

○ あなたが妻（マリー）の立場だったら、父親が入院した時、どうすると思いますか。もし夫（ピーター）の立場だったらどうすると思いますか。また子ども（アンナ）の立場だったら、どう感じると思いますか。

○ 「3年の家族の空白」について、どんな風に感じますか。

2 「初めての中学校」

ピーターとマリーにとって、何より大切なのは娘の教育だ。娘のアンナは勉強が得意で、国でも勉強で困ることはなかった。ピーターもマリーも、娘の将来には大きな期待を寄せていた。また同時に、親として娘の将来に大きな責任を感じていた。

マリーとアンナが来日して間もなく、様々な手続きのために家族3人で区役所に出向いた時、早速、娘の学校をどうしたらいいのか、窓口で相談してみた。窓口の方がすぐにもよりの中学校に連絡をとってくださった。そして早速、学校に面談に出向くことになった。

面談に出向く日、家族3人、皆、朝からとても緊張していた。いざ面談当日になると、急にあれこれ、心配なことが出てきた。そもそも何語で学校の先生と話をすればいいのだろう。学力テストか何かあるのだろうか。初めて学校に行くのだから、何か手土産でも持って行った方がいいのだろうか。考え始めればきりが無い。

(377 字)

- あなたが親の立場だったら、一番心配なのはどんなことだと思いますか。また、娘のアンナの立場だったら、何が一番心配ですか。

3 「日本語を勉強しておけばよかった」

娘の学校に到着すると、すぐに校長室に案内された。先生と思われる方々が何人かいらっしゃる。自己紹介をしてくださったので、何度も会釈を繰り返したが、実は先生方のお名前は全然聞き取れなかった。先生方の自己紹介が終わり、ピーターは「初めまして。A国から参りましたピーターと申します。こちらは、妻のマリー、こちらは娘のアンナです。しばらく事情があって家族離れて暮らしていましたが、やっと一緒に生活できるようになりました。分からない事ばかりでご迷惑をおかけしますが、どうぞよろしくお願い致します。」と言いたいと思ったが、出てきた言葉は、「初めまして。ピーターと思います。これは奥さん、マリー、これは子ども、アンナ……ありがとう……」だった。この時、ピーターは、日本に来て初めて、日本語をもっと勉強しておけばよかったと後悔した。一人の若い女の先生が、見かねたかのように、きれいな英語でゆっくり話し始めてくださった。

(400 字)

- ピーターの話した日本語によって、学校の先生方が家族に対してもつ印象は、変わるでしょうか。

4 「校長先生からの質問」

ソファーを勧められて、3人並んで座った。英語で話してくださった「もりやま先生」以外は、どの先生もとてもこわい顔をしていらっしやるように見える。

皆が座って話が始まると、校長先生が日本語でこうおっしゃった。

「いつまで日本にいますか。」

ピーターでも分かる簡単な日本語だった。日本語の意味は分かったが、自分のおかれた状況を考えると、答えは難しかった。

「分かりません。」

校長先生は、自分の日本語が通じなかったと思われたのか、今度はもう少しゆっくり、はっきりした口調でおっしゃった。

「いつまで、日本に、いますか。いつ国へ帰りますか。」

マリーとアンナが心配そうにこちらを見ている。ピーターの頭の中は真っ白になったが、父親として毅然とした態度が必要だ。

「先生の質問は分かりました。でも今まだ分かりません。」

(345 字)

- 校長先生は、どうしてこんな質問をしたのでしょうか。あなたがピーターの立場だったら、先生の質問に対して、どう対応しますか。

5 「学年を下げる？」

色々な話をしているうちに、どうやら学校の先生の一つの心配は、アンナが日本で高校受験をするかどうかなのだと何となく分かってきた。そしてまた、校長先生が、少しゆっくりと質問をされた。

「国で中学 1 年生が終わっていますから、2 年生でいいですね。」
ピーターは、ちょっとびっくりした。子供の学年は、子どもの親が「いい」とか「いやだ」とか言えることなのだろうか。

「1 年生も大丈夫ですか。」

ピーターの質問を聞いて、校長先生はちょっと困ったようだ。すごく早口で説明をなさり、それを英語の先生が通訳してくださった。校長先生のご説明は、「国の事情にもよるので絶対だめだとは言えない。だが、1 年ぐらい長くいたところで、どうせ高校入試の日本語まで克服できるものでもないので、年齢にあった学年に入るのが一番良いのではないか」とのことだった。すると、それまで黙っていたアンナが急に口を開き、英語ではっきりと校長先生に話した。

「私は 1 年生の初めから日本語で勉強したいです。」

(420 字)

○ あなたがピーターの立場だったら、どうしますか。